

唐代詩人と書

田 中 有

かつて李白と書の関わりを取り上げたことがあり、当然、杜甫や他の詩人たちはどうなのかと問われた。そこで今回は唐の詩人たちの書が当時の人にどのように見られていたか考えてみたい。

まず杜甫（七一二～七七〇）であるが、残念ながら李白ほどには伝えられず、元に至って鄭杓の『衍極』古学篇に「太白は無法の法を得、子美は意を以て之を行ふ」と言い、劉有定は「楷・隸・行・草を善くす」と注し、元々明の陶宗儀『書史会要』巻五・唐にも、劉注と同じく「楷・隸・行・草に於て工ならざる無き者なり」と言うだけである。ただ明の胡儼（一三六一～一四四三）は宮中で親筆「贈衛八处士詩」を見て、「字は甚だ怪偉」と評している。やはり詩名の高さには及んでいない。

しかし書に対する関心が深かったことは、次のような諸詩によつて窺えよう。

「飲中八仙歌」（杜少陵詩集二）

「殿中楊監見示旭草書圖」（同一五）

「李潮八分小篆歌」（同一八）

「八哀詩」（同一六）

「送顧八分文字適洪吉州」（同一三）

「丹青引」（同一三）

「得房公池鷺」（同一二）

「石硯」（同一四）

次に他の代表的詩人について見ることにしたい。唐代は書論の盛行した時代で、品評も南朝・宋の羊欣（三七〇～四四二）の『古来能書人名』、梁の袁昂（四六一～五四〇）の『古今書評』、蕭衍（梁武帝、四六四～五四九）の『古今書人優劣評』、庾肩吾（四八七～五五二）の『書品』、等を受けて、李嗣真（？～六九六）の『書後品』、張懷瓘（開元年間、七一三～七四二）の『書斷』、寶泉（天宝年間、

七四二〜七五五)の『述書賦』、呂総(不詳)の『統書評』等が出現している。

これらの書に評価されているのが、次の四人である。

① 虞世南(五五八〜六三七) 〈李・張・寶〉

② 張 旭(生卒年不詳) 〈寶・呂〉

③ 賀知章(六五九〜七四四) 〈寶・呂〉

④ 王 維(七〇一〜七六一) 〈寶〉

次の宋代には、朱長文(一〇四一〜一一〇〇)の『統書断』があり、また北宋の徽宗(一一〇八〜一一三五、一一〇一〜一二二五在位)朝の内府收藏書蹟の総目録『宣和書譜』の評伝がある。この二書中には前掲の四人に加えて次の十一人が見られる。

⑤ 韓愈(七六八〜八二四) 〈朱〉

⑥ 張 籍(七六六?〜八三〇?) 〈宣〉

⑦ 李 紳(七七二〜八四六) 〈朱〉

⑧ 白居易(七七二〜八四六) 〈宣〉

⑨ 元 稹(七七九〜八三二) 〈宣〉

⑩ 薛 濤(?〜八三三) 〈宣〉

⑪ 杜 牧(八〇三〜八五二) 〈宣〉

⑫ 李商隱(八一二?〜八五八) 〈宣〉

⑬ 司空圖(八三七〜九〇八) 〈宣〉

⑭ 韓 偓(八四一?〜九三二?) 〈宣〉

⑮ 釈齊己(八六四?〜九四三?) 〈宣〉

① 虞世南(字は伯施、封県名から虞永興とも呼ばれた)は、書に於いて欧陽詢(五五七〜六四二)・褚遂良(五九六〜六五八)とともに初唐の三大家にあげられ、とくに欧とは「欧虞」と並称された。

『書後品』は「上下品」十二人に品第し、

蕭散洒落、真草惟命。如羅綺矯春、鶴鴻戲沼、故当子雲之上。

と、南朝・梁の蕭子雲(四八六〜五四八)より上位にあるとしている。

『書断』では、隸・行・草書を「妙品」として、

其書得大令(王献之)之宏規、含五行之正色。姿榮秀出、智勇存焉。秀嶺危峰、处处間起。行草之際、尤所偏工。及其暮齒、加以逾逸。臭味羊(欣)・薄(紹)之、不亦宜乎。是則東南之美、会稽之箭也。

と、東晋の王献之(三四四〜三八八)を学んだ羊欣(三七〇〜四四二)・劉宋の薄紹之と共通するものと認め、さらに続けて、欧陽詢と匹敵するが、内に柔剛を含み、君子の格としてはまさと評している。『述書賦』は、

永興超出、下筆如神。不落疏慢、無慙世珍。然則比文

幾（阮研）老成。与貞白（陶弘景）而德隣。如層台綴步、高謝風塵。

と、蕭子雲と並称される梁の阮研と陶弘景（四五六〜五三六）を比較の対象としている。

宋の朱長文も張懷瓘を承けて「妙品」に入れ、同じように、

其為書、氣秀色潤、意和筆調、然而合含剛特、謹守法度、柔而莫瀆、如其為人。雖歐・虞同称、德義乃出詢右也。

と評している。『宣和書譜』は、十三点を所蔵するとし、隋の智永に学び、ついに王羲之と相い先後するに至つたと記している。

虞世南は、詩・書のみならず、史伝に、太宗の信任あつく、忠謙・友悌・博文・詞藻・書翰の五絶を兼ねる者と賞賛されたと伝えられるように、全人格的に高く評価されてきたのであった。

②張旭（字は伯高、官名から張長史とも呼ばれた）は、杜甫の「飲中八仙歌」に「張旭三杯草聖伝はる」と詠ぜられるように酒と後に狂草と呼ばれる草書で名高い。『述書賦』も、

張長史則酒酣不羈、逸軌神澄、回眸而壁無全粉、揮筆

而氣有餘興。若遺能於学知、遂独荷其顛称。と、その奇狂を伝えており、『統書評』も、

張旭草書、立性顛逸、超絶今古。また一本に、筆鋒詭怪、点画生意。

と言う。『統書断』は、顔真卿（七〇九〜七八五）・李陽冰（七二三〜七八〇？）とともに最高位の「神品」三人中に入れ、

主荒政龐、不見抽擢。棲遲卑冗、壯猷偉氣、一寓於毫牘間。蓋如神蚪騰霄漢、夏雲出嵩華。逸勢奇狀、莫可窮測也。

と、草書について称賛している。これに對して『宣和書譜』は、草書二十四点を収蔵することを言い、草書以外についてふれ。

其名本以顛草、而至於小楷行書、又復不減草字之妙。其草字雖奇怪百出、而求其源流、無一点画不該規矩者。或謂張顛不顛者是也。

と、小字の楷書・行書も草書に劣らないとしている。

③賀知章（字は季真、四明狂客と号した）も、杜甫が「飲中八仙歌」の筆頭にあげて詠ずるのように、酒仙である。『述書賦』は、

湖山降祉、狂客風流、落筆精絶、芳嗣寡仇、如春林之

綉彩、実一望而写憂。崑容省闈、高逸谿達。解朝服而
帛鄉、斂覽裝而辭闕。

と言い、兄の竇蒙の注に「少くして文詞を以て名を知ら
る。草・隸書を工にす」と草・隸書に長じたとしてゐる。

『統書評』は、

知章真行書、縦筆如飛。酌而不竭。

と、楷書と行書をあげている。『統書断』は、「能品」六十
六人中に入れ、

每醉輒厲文、筆不停綴。善草・隸。好事者具筆硯從
之、意有所愜、不復拒、一紙纔数十字。世甚珍之。

と、書きぶりを伝えている。『宣和書譜』も、草書十二点
を収載するとし、

每醉必作為文詞。初不經意、卒然便就。行草相間、時
及於怪逸、尤見真率、往往自以為奇。使醒而復書、未
必爾也。

と、酔書の妙を語っている。

④王維（字は摩詰）は、詩に於ては後に李白の「詩仙」、
杜甫の「詩聖」に対して「詩仏」と称され、画に於いても

南宗画の祖と仰がれている。『述書賦』は、
詩人国風、筆超神迹。

と、詩と書について言い、『統書断』は、「能品」六十六人

中に入れ、

善詩、工草・隸、善画。名盛於開元・天宝間。豪英貴
人、虚左以迎。

と、草書・隸書に長ずるとしている。なお唐の張彦遠『歷
代名画記』卷十・唐朝下に、画人としてあげられるが、書
については言及せず、ただ「藍田の南に別業を置き、水木
琴書を以て自ら娛しむ」と記すだけである。

以上のように書名の高い詩人としては、虞世南が第一に
あげられる。楷書を完成させた初唐書壇を代表し、しかも
唐における書法の大宗王羲之を継承する者として尊崇され
たことから認められよう。これと対照的に存在するのが
張旭である。その大いにもてはやされた狂草は、当時の詩
人たちの気風にかなったものであり、奔放な精神の解放の
さまは、新しい書の魅力として喝采を浴びたのである。書
を学ばなかったともいわれる韓愈も「送高閑上人序」で、
次のように張旭の書の掬る所は感情の動き、自然界の万物
と現象にあると説いている。

往時張旭善草書、不治他技。喜怒・窘窮・憂悲・愉
佚・怨恨・思慕・酣醉・無聊・不平・有動於心、必於
草書焉發之。觀於物、見山水崖谷、鳥獸虫魚、草木之
花実、日月列星、風雨水火、雷霆霹靂、歌舞戰鬪、天

地事物之變、可喜可愕、一寓於書。故旭之書、變動猶鬼神、不可端倪、以此終其身而名世。

醉狂のさまに惑わされず、その深奥を見きわめんとする卓見である。

⑤韓愈以下の十一人は、宋代になってからの評で、『統書断』は韓愈と李紳を「能品」六十六人に入れており、他は『宣和書譜』に見られる。いづれ稿を改めて考えることにして、参考までに紹介するだけにとどめたい。

『統書断』

⑥韓愈字退之、退之雖不學書、而天骨勁健、自有高処、非衆人所可及。

⑦李紳字公垂、嘗觀其法華寺詩、筆老字勁、亦為無愧於前輩焉。

『宣和書譜』

⑧張籍字文昌、觀夫字画凜然、其典雅幹旋処、当自与文章相表裏、不必以書專得名也。今御府所藏行書一。

⑨白居易字樂天、觀其書曼年・洛下兩帖与夫雜詩、筆勢翩翩。大抵唐人作字、無有不工者。如居易是以文名世、至於字画、不失書家法度。作行書、妙処与時名流相後先。蓋胸中淵著、流出筆下、便過人數等。觀之

者、亦想見其風概云。今御府所藏行書五。

⑩元稹字微之、其楷字蓋自有風流醞藉、俠才子之氣、而動人眉睫也。要之、詩中有筆、筆中有詩、而心画使之然耳。今御府所藏正書一。

⑪婦人薛濤、作字無女子氣。筆力峻激。其行書妙処、頗得王羲之之法、少加以學。亦衛夫人之流也。每喜写己所作、詩語亦工、思致俊逸、法書警句、因而得名。今御府所藏行書一。

⑫杜牧字牧之、作行草、氣格雄健、与其文章相表裏。大抵書法、至唐自歐・虞・柳（公權）・薛（稷）、振起衰陋。故一時詞人墨客、落筆便有佳処。況如杜牧等輩耶。今御府所藏行書一。

⑬李商隱字義山、觀其四六稟草、方其刻意致思、排比声律。筆画雖真。亦本非用意、然字体妍媚。意氣飛動、亦可尚也。今御府所藏二。

⑭司空圖字表聖、及觀其贈晔光草書歌、於行書尤妙知筆意。史復称其志節凜凜、与秋霜爭蔽。考其書、抑又足見其高致云。今御府所藏行書二。

⑮韓偓字致光、考其字画、雖無嘗於当世、然而行書亦復可喜。嘗說其題懷素草書詩云、怪石奔秋澗、寒藤挂古松。若教臨水畔、字字恐成龍之句。非潜心字字、其作

語不能迨此。…今御府所藏行書二。

⑮ 积斉已、姓胡、…筆跡洒落、得行字法。望之知其非尋常
积子所書也。…今御府所藏九。

注

(1) とりあえず松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店刊)にあげられている詩人に拠ることにした。

(2) 『書後品』は、逸品五人・上上品一人・上中品七人・上下品十二人・中上品七人・中中品十二人・中下品七人・下上品十三人・下中品十人・下下品七人の十段階に分けており、『書品』の上之上から下之下までの九段階の上に逸品を加えている。

(3) 蕭子雲は、中中品に入れられている。

(4) 『書断』は、神品二五人・妙品九八人・能品一〇七人の三段階に分けている。

(5) 王羲之の生卒年には、三〇三〜三六一、三〇六〜三六四、三〇七〜三六五、三三二〜三七九の諸説がある。

(大東文化大学)